Salvador Dali

H.R. Giger

Chris Foss

Udo Kier

Mick Jagger

Dan O'Bannon

Orson Welles

Pink Floyd

Carrie Fisher

David Lynch

Moebius

THIS IS ALEJANDRO JODOROWSKY

VOL.2

『ホドロフスキーのDUNE』の世界

1975年、アレハンドロ・ホドロフスキー46歳（映画監督）は、荒唐無稽で壮大な映画を企画した。

ホドロフスキーのDUNE 私はこう観た!!

クリエーターの神髄とは「命にかえても作品を完成させること。未完では遺志を伝えようがない」。固くそう信じて、これまで物創りを続けてきた。だから、「未完の大作」として伝説にもなっているホドロフスキーの『DUNE』を題材にした本作の話を聞いた時、正直観たいとは思わなかった。ところがどうだ。**撮影すらしていないのに、『DUNE』は完成しているではないか!どんなメイキングより、ドキュメンタリーより、勇気と感動を与えてくれる!**

ホドロフスキー・ファンのみならず、物創りに携わる者、**物創りを目指す者必見の作品**といえよう。

これは『デューン/砂の惑星』で座礁した記録ではない。命からがら逃げ帰った制作者達による悔恨の愚痴でもない。

「新たな魂の惑星」を目指したホドロフスキーとその同志達による、映画の未来を語る物語である。

これは、ホドロフスキーそのものであり、ホドロフスキーの人生であり、ホドロフスキー作品『DUNE』だ。

小島秀夫
（ゲームデザイナー/「メタルギア」シリーズ監督）

僕は、ホドロフスキーの大ファンなのです。

実は最近、彼のBlu-ray作品が何枚か出たので、買い直したくらいです。

彼の作品に関して、ちょっと調べてみたら日本で発表されてない作品が、まだ二作品あるんですね。

このドキュメントを観て知ったのですが、絵コンテ、脚本は、ほぼ完成してたみたいで、あの配役、スタッフで制作していたら、いったいどうなっていたんでしょう?

考えただけで、ワクワクしてしまいます。

ダリ、ミック・ジャガー、ピンク・フロイド、etc。

以前、テリー・ギリアムの完成しなかった映画のドキュメントを観たんですが、映画を作るためには、いくつもの越えなくてはいけない難関があるんですね。

ましてや、こんな途方も無い作品…。

しかし、この作品そして制作に関わろうとしたスタッフが、後に『エイリアン』を生み出したり、その後の優れた映画の雛形になったり、大きな影響を与えていて、それはとても素晴らしい事実だと思います。

岡村靖幸（ミュージシャン）

ピンク・フロイドにミック・ジャガー、BDの巨匠メビウス、世紀の画家サルバドール・ダリに大俳優オーソン・ウェルズ… 沸き出すイメージに駆り立てられるまま、超人的エネルギーを放出する各界の表現者達に、自分の作る映画に携わらないかと声をかけまくる。しかも資本経済のツールと化す事を拒み、カネに踊らされない真に自分が創りたい作品として、『スター・ウォーズ』以前にホドロフスキーが生み出そうと賢明になっていた幻のSF大作『DUNE』。

ハリウッドの映画業界をも恐れさせる強靭な精神力と、創作に対する闘魂意欲の詰まった巨大燃料タンクを抱えた、**80歳半ばの芸術家の驚異的タフさは、この世に存在する、全ての表現者が知っておくべきものなのではないだろうか。**

実現できなかったという顛末も含めて『DUNE』は至上の大傑作であり、何よりもホドロフスキーの存在こそが宇宙のように壮大なSFなのだと感じさせられる。**強壮作用満点の最高のドキュメンタリー作品。**自分も死ぬまで突っ走ろうとしているこの人の生き様を目指したくなった。

ヤマザキマリ
（漫画家/『テルマエ・ロマエ』）

ホドロフスキーの作品として私が触れていたのは『El Topo』『The Holy Mountain』『Santa Sangre』の3作品だけだった。強烈な個性を放つその全く違った3作品は1度目にしただけで，私が知り得る映画の中でも群を抜いて特別な存在となっていた。

『DUNE』の存在はこのドキュメンタリーを通して知った。その**作品への自由な発想と一寸も妥協しない姿勢にホドロフスキーの人間性の全てが伺える。やはり映画はその人自身。**彼の口から溢れ出るこの映画に関するキーワードはどれも興味そのものでしかなく、またその全てが個性的で強い。

強さと強さを引き合わせて、調和を取ることが出来たのはホドロフスキーだけなのかも知れない。必ず超大作となったであろう『DUNE』は間違いなく幻の作品だ。彼の頭の中にだけあった『DUNE』を一瞬でも垣間見えたこの作品はバラバラになっていたホドロフスキーの身体の一部を引き戻してくれた様な気がした。子供のように感情豊かに、純粋まっすぐに"映画"を追求する奇跡の監督は未だ現役で健在である。

長尾悠美
（Sisterディレクター／バイヤー）

これまで評論を書くとき、ずっと黙っていたことがある。**「創造とは実は設計ではなく降霊術なのではないか」**という疑念である。うかつに言うと「アブナイやつ」あつかいされかねないそんな核心を、この恐るべきドキュメンタリー映画は真っ正面からズバリと突いてきた。70年代から見てきた数々の著名SF映画も、未完の映画『DUNE』でホドロフスキーがめざした猛毒を希釈したもの。まさに人類を覚醒させる妙薬メランジを、口当たりよい飲み物にしたに過ぎないと発覚したこの驚き。そして**ホドロフスキー監督は**同時に**「人たらし」の典型**でもある。まるで**『七人の侍』**か**『ドラゴンクエスト』**のように一人ずつ戦士をリクルートし、映画に必要な天啓をあたえて最高の仕事を触発していく。そうだ。やはりこれは原作『DUNE』で描かれた「意識の問題」ではないか。つくる人と観る人と、意識をつなぐ映画がメランジなのだ。**パズルの断片すべてがピタリとハマるそんな触発の快楽**を、どうか一人でも多くの方に味わっていただきたい。

氷川竜介
（アニメ特撮研究家/日本SF作家クラブ会員）

わたしがまだ地球にいた頃、『デューン』という小説が話題になっていた。純粋数学とスパイスの力で宇宙を移動することのできる世界とはつまり、誰かの幻想に限りなく近い。つまりクスリは人間にではなく宇宙に対して作用するのだ。『デューン』はそうした宇宙規模の幻覚小説であると同時にテラフォーミングについての小説であり、惑星規模の生態系の完成と個人の精神的完成がここでは同じことになりうる。

すなわち『デューン』の映画化とは「個人の完成」と「惑星の完成」と「映画の完成」を同時に試みるということになる。素直に考えるとそうなる。**「一本の映画を完成させること」と「映画という文化を完成させること」は通常異なる。この違いがわからない男が一人いたわけである。**実はもっとたくさんいた。人が人である以上、その両方は達成しがたい。ここにはその一方がある。どちらなのかは観る者によって異なるはずだが、それはホドロフスキーの責任ではない。

円城塔（作家/『道化師の蝶』）

昨年末、私は導かれるように書店で「映画秘宝EX 狂烈ファンタジー映画100」を手にしていた。「もしホドロフスキーが『砂の惑星』を作ったら、という妄想全開インタビューのドキュメンタリー映画が来年公開」と記されてあった。そしてこの度『ホドロフスキーのDUNE』を鑑賞させていただいた。ホドロフスキー曰く「『預言書』を作ろうと考えた」。これはまさにホドロフスキーと共に時空を越えて、パリ、ロサンゼルス、ハリウッド、ロンドン、ニューヨーク、バルセロナ、グリュイエール、そして**遥か宇宙を旅する90分の素晴らしい「体験」であった!!**

「妄想全開」?いやいやとんでもない!あの世界に2つしかない分厚い絵コンテ企画書こそが、既に「『DUNE』は完成していた」証なのだ。オーソン・ウェルズ監督『黒い罠』にインスパイアされたという、冒頭の宇宙における最大の長回しシーンの絵コンテが動き出した瞬間、誰よりも50年先を走っていたホドロフスキーがようやく映画界における偉人となったのだ!

ザ・グレート・サスケ
（プロレスラー）

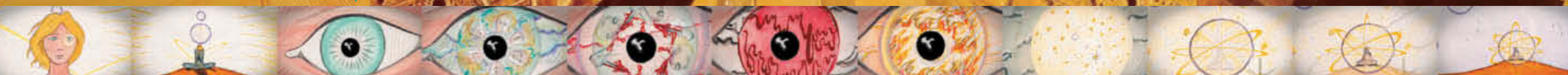
もしも『DUNE』が完成していたら。現在の映画史は大きく書き換えられていたと誰もが言う。もしかしたら『スター・ウォーズ』だって『エイリアン』だって生まれなかったかもしれない。でも、歴史にifはなくて、僕たちは「DUNEが作られなかった現在」を生きてる。

この映画は、そんな現在を生きる関係者たちの悲喜こもごもや、監督自身の言葉を手がかりにして、『DUNE』とは一体何だったのかを解き明かしていく。果たして答えは出るのかどうか、それは自分の目で見てほしいけど、言えるのは『DUNE』が持つ可能性だ。完成しなかったからこそ、それぞれの想像が膨らんで、『DUNE』像は変わり続けていく。**どんな映画よりも常に新しいのだ。**これ以上の未完の大作はないかもしれない。

あともうひとつ。**ゴールするよりも、まずはスタートしてみること。動き出せば人が集まって、場所ができる。**ここで出会った人たちが別の映画をつくったみたいにきっかけが生まれる。そのことに改めて気づかされた映画だった。

家入一真（活動家）

※敬称略、順不同



見るドラッグ、それは映画以上のものである

TEXT:柳下毅一郎(映画評論家・特殊翻訳家)

「ホドロフスキーのDUNE」は一本の映画をめぐる物語である。一人の映画監督が一本の映画を作ろうとして、それが失敗に終わる顛末記だ。だがもし本当にそれだけなら単なるDVDのおまけ程度のものにしかなるまい。もちろんそれは単なる一本の映画ではなく、もちろん、ホドロフスキーの挑戦は単なる映画作りではない。それは不可能への挑戦、この世に存在し得ないものを生み出そうとする試みなのだ。

もしもホドロフスキーが映画を作りたかっただけなら、別にダリを銀河皇帝にキャスティングする必要などなかった。オーソン・ウェルズにハルコンネン男爵を演じさせ、そのために専属シェフを雇う必要などなかっただろう。別にウェルズでなくとも、ウェルズに匹敵するぐらいの演技をできて、その半分も手間がかからない俳優は何人もいたはずだ。だが、ホドロフスキーはあえてウェルズと共に苦労することを選んだ。なぜなら……。なぜの理由はいくつもあるだろう。だが煎じ詰めれば、それは「どう考えてもあり得ない選択だから」である。ホドロフスキーは自分自身にがんどん高いハードルを課していった。もともと「映画化不可能」と言われた長大な原作を選び、よりによって一番扱いの面倒そうな役者をキャスティングし、映画未経験のスタッフを集め、未曾有の規模の予算を要求し……まるで最初から失敗を望んでいるかのように難しいほうへ難しいほうへと向かっていき、当然のように映画は空中分解を遂げてしまう。

ホドロフスキーにとって「DUNE」は不可能への挑戦だった。不可能を可能にする魔法こそがホドロフスキーの求めたものであり、そのためには「DUNE」はただの映画であってはならない。ホドロフスキーが書いた「DUNE」のストーリーでは、レトは生まれないはずの子供を作り、ポールは奇跡によって宇宙に命を授ける。その映画によって、ホドロフスキーは人々の意識を変容させようとした。見るドラッグ、それは映画以上のものである。ただの映画では奇跡はおこせないのだ。だからホドロフスキーはあえて自分で映画の中の行為をなぞり(そのさまは「ホドロフスキーのDUNE」であますところなく語られている)、映画と現実を混同させて奇跡を起こそうとする。はるかな先に見える蜃気楼をつかもうと手を伸ばすのだ。ホドロフスキーは自分自身にがんどん高いハードルを課していった。もともと「映画化不可能」と言われた長大な原作を選び、よりによって一番扱いの面倒そうな役者をキャスティングし、映画未経験のスタッフを集め、未曾有の規模の予算を要求し……まるで最初から失敗を望んでいるかのように難しいほうへ難しいほうへと向かっていき、当然のように映画は空中分解を遂げてしまう。

ホドロフスキーにとって「DUNE」は不可能への挑戦だった。不可能を可能にする魔法こそがホドロフスキーの求めたものであり、そのためには「DUNE」はただの映画であってはならない。ホドロフスキーが書いた「DUNE」のストーリーでは、レトは生まれないはずの子供を作り、ポールは奇跡によって宇宙に命を授ける。その映画によって、ホドロフスキーは人々の意識を変容させようとした。見るドラッグ、それは映画以上のものである。ただの映画では奇跡はおこせないのだ。だからホドロフスキーはあえて自分で映画の中の行為をなぞり(そのさまは「ホドロフスキーのDUNE」であますところなく語られている)、映画と現実を混同させて奇跡を起こそうとする。はるかな先に見える蜃気楼をつかもうと手を伸ばすのだ。ホドロフスキーは自分自身にがんどん高いハードルを課していった。もともと「映画化不可能」と言われた長大な原作を選び、よりによって一番扱いの面倒そうな役者をキャ

この貨幣経済という システムは、私たちを奴隷にする。しかし映画には心がある。精神も、無限の力も、大きな志もある。

by ホドロフスキー

私が作りたかったのは、LSDをやらなくても、あの高揚感を味わえる、人間の心の在り方を変える映画だ。

by ホドロフスキー

レディー・ガガもプレゼンした今年のSXSWに登壇!!

米国テキサス州オースティンで毎年3月に開催されている映画・音楽・インタラクティブの見本市SXSW(サウス・バイ・サウス・ウエスト)。レディー・ガガもライヴやパネル講演を行った今年、アレハンドロ・ホドロフスキー監督の23年ぶりの新作「リアリティのダンス」が、5月23日からの全米公開に先駆けプレミア上映され、ホドロフスキー監督が登壇した。

3月10日、会場となったオースティン・コンヴェンション・センターの観客の前に登場したホドロフスキーは、映画を制作する理由について「人々の感受性を豊かにするために、内面の別世界へ誘いたい。私の鼓動を一緒に聞いて、そして何かを感じてもらいたい。そうすればきっと、あなた自身を発見することができるでしょう。現代社会は病んでいます。世界を変えることは途方もなく困難ですが、アーティストはわずかでもそれをすることができます」と述べ、「ホドロフスキーのDUNE」の中でも語られている、「映画は人間の魂を深く探求するアートである」という哲学を明らかにした。

またSXSWの後、3月14日にはニューヨークのMoMAでも「リアリティのダンス」の上映とディーチインが行われた。

ホドロフスキーのDUNEが生んだもの

TEXT:中子真治(元映画ジャーナリスト) ILLUST:小池桂一

予言書となる映画を作るにふさわしい戦士として、ホドロフスキーが語る最初のこだわりの人物、メビウスとダン・オバノンが、ともにこのドキュメンタリー製作をまえに他界していることに無念を覚える。できることならクリス・フォスやH・R・ギーガーのように、彼らのいまの肉声を聞きたかった。

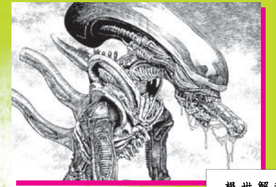
きっと私はホドロフスキー版「DUNE」についてオバノンに話を聞いた最初で唯一の日本人だと思う。

1979年5月、「エイリアン」の初日をハリウッドで迎え、件の映画の原案者であり脚本も書き、ヴィジュアル・コンセプト・コンサルタントとしてもクレジットされているオバノンにインタビューするため、私はロサンゼルスを訪ねていた。オバノンにはそれより早く、共同脚本家兼美術監督兼SFXスーパーバイザーとして、さらに主演も張ったカルトSF映画「ダーク・スター」……そう、ホドロフスキーが「DUNE」のSFX監督にオバノンを抜擢することに決めた因縁の映画……にすっかり心酔していたから、初対面のような気がしなかった。しかもインタビューのために招かれた先というのが、前日、神経性の急性胃炎で運び込まれた病院の個室という、とくにプライベートな場所だったから、オバノンとの会話は誰に気兼ねすることもなく弾んだ。話題は当然「エイリアン」から、そのヴィジュアルの起源ともなった「DUNE」に及ぶ。

おそらく私の英語力が脆弱過ぎたためだろう、オバノンの時張もあったにちがいない。ホドロフスキーの証言とはいくぶん異なるが、ことに「エイリアン」に関して、問題の多かったプロダクションが脱ぐスムーズに進んだのは「DUNE」の経験と、そこから得たネットワークのおかげだったという彼の話に疑う余地はない。

映画経験の乏しいメビウスやクリス・フォスが、コンセプト・デザインを残したままプロダクションを離れざるを得なかった話。1年遅れで参加したギーガーが短期間のうちに偉大な仕事を成し遂げたのも「DUNE」ありきだった。オバノンと彼の仲間が「DUNE」のために築き上げたイメージが、その後の「スター・ウォーズ」「マトリックス」「フラッシュ・ゴードン」といったSF映画に伝播していく様子もドキュメンタリーは紹介している。

ホドロフスキー版「DUNE」を観たいという欲求不満を無聞に募らせる罪な今作は、私にとって、いまはできオバノンへの憧憬をますます強めさせる個人的な映画なのだった。



▲「エイリアン」(1979年)

▲「スター・ウォーズ」(1977年)

▲「マトリックス」(1999年)

▲「フラッシュ・ゴードン」(1980年)

「デューン」とは、芸術と映画の神の降臨だ。とても神聖で、自由で、新しい視点から精神を解放させるものを作って、世界中の人々の意識を根本から変えたい。

by ホドロフスキー

私は300歳まで生きたい。最高に芸術的な映画を作りたいなら、作ればいい。失敗しても構わない。挑戦するんだ。

by ホドロフスキー

この映画に携わる、すべての人間は魂の戦士だ。魂の戦士ではない者とは映画を作れない。

by ホドロフスキー

フランク・パヴィッチ監督語る

「いろいろなバージョンの『DUNE』を無限に想像できるようにしたかった」

――まずはこの映画を作るプロセスについて聞かせてください。

もともとホドロフスキーの映画のファンなんだけど、あるとき、彼が撮るはずだった「DUNE」のことを知って驚いた。ミック・ジャガー!?ダリ!?ピンク・フロイド!?これはドキュメンタリーを作らなきゃと思ったよ。それで、2010年の1月、ホドロフスキーのエージェントにメールをしたんだ。「DUNE」についてのドキュメンタリーを作りたい、ってね。しばらくたたらなんと、本人から返信が来たんだ!びっくりしたよ!でも、もし悪い返事だったら……と怖くて1週間くらいメールを開けなかった(笑)。やっと勇気を振り絞ってメッセージを開いたら、短いメッセージが書いてあった。「パリにおいで。話をしよう」と。それですぐにホドロフスキーの自宅に会いに行ったんだ。10分ほどの短いミーティングだったけど、ぼくの企画を話したんだ。彼はとてもオープンに話をしてくれたよ。「いいアイデアだ」と言ってくれて、この映画の制作についてOKをくれたんだ。

――ホドロフスキー作品との出会いは?

90年代前半だったと思うけど、当時アメリカでは、ホドロフスキーの作品は観られなかったんだ。彼がプロデューサーと喧嘩をしたからね。それでもどうしても観てみたくて、コピーのコピーのコピーの……6代目くらいのVHSを入手したんだけど、映像が汚すぎて観られなかった(笑)。その後、日本版のレーザーディスクを入手して、やっと「エル・トポ」を観たんだけど、今度は日本語字幕だしスペイン語もわからないから、何を言ってるかわからない……(笑)。とにかく、そんな風にして苦労してやっと彼の作品にたどり着いたんだ。

――「DUNE」のストーリーボード集をみて、どう思いましたか?

もうホ当にすばらしい、感動したよ。シーン1から90まで、すべて詳細が書き込んでるんだ。カメラワークから人の動きまで、すべて。ドキュメンタリーの中でホドロフスキーが言っていたけど、メビウスの絵コンテはホドロフスキーのカメラなんだ。

――このドキュメンタリーで、みんながそれぞれの「DUNE」を心の中に描くことができました。「DUNE」は完成されていないけれど、プロジェクトとして生き続けていく作品、完成されないことによって完成する作品なのかもしれないですね。

それが、この映画の最後の部分でやろうとしたことだ。紙の上に描かれた画に少しだけ命を吹き込む。やりすぎずに、観客がそこから映画全体を想像できるような、かすかな命を吹き込んだ。観客はそこから、ホドロフスキーの「DUNE」や、ホドロフスキーと観客自身による「DUNE」など、いろいろなバージョンを無限に想像できる。「DUNE」は失敗ではない。すべての "ウォーリアーズ" はキャリアを伸ばし、成長し、転換点を迎えた。みんながホドロフスキーの刻印を受けたんだ。彼らが共有した濃厚でクリエイティブな時間は糧になった。そして僕は、このドキュメンタリーを製作した。映画から与えられ続け、映画の影響で自分が変わり続ける。僕は、今まで語られなかったこの圧倒的な物語、彼の人生における最も大切な物語のうちの1つを託してもらえたことにとても感謝している。永遠に感謝し続けると思う。

――完成した映画を観てホドロフスキー監督はどういう反応だったのでしょうか?

彼が初めてこの映画を観たのは2013年のカンヌ国際映画祭のプレミア上映だったんだ。僕の隣が奥様でその隣がホドロフスキー監督だった。緊張したよ。上映中も彼がどんなリアクションをするか、視界の端でずっと気にしていたんだ。そうしたら、映画の最後のほうで涙を拭いていたんだ!とにかく、とても嬉しかった。そして上映が終わってから、彼に「どうでしたか?」と聞いたところ、一言こう言ってくれたんだ。「パーフェクト!」

人生の目的とは、自分を魂として昇華させること。私にとって映画は芸術だ、ビジネスである前に。

by ホドロフスキー

写真:荒牧耕司

フランク・パヴィッチ / Frank Pavich

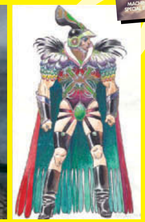
1973年、ニューヨークで生まれ。現在はスイス・ジュネーブ在住。1995年、ニューヨーク・ハードコアシーンを追ったドキュメンタリー「N.Y.H.C.」を監督、その後、映画やテレビのプロジェクトに携わる。「ホドロフスキーのDUNE」は彼の初の劇場上映作品であり、2013年カンヌ国際映画祭、監督週間でプレミア上映され、その後も多くの映画賞を受賞している。

幻の『デューン』ストーリーボード集からプロダクション・デザインを公開!!

『ホドロフスキーのDUNE』に登場する当時の「DUNE」ストーリーボード集。膨大な絵コンテ、設定資料が掲載されたこの本は、映画の資金を得るために作られ各映画製作会社に配られた。フランク・パヴィッチ監督によると、ホドロフスキー監督、プロデューサーのミシェル・セドゥーの元に一冊ゴウ現存が確認されているという。今回は、その一部を特別公開する。

▲DUNEストーリーボードの表紙

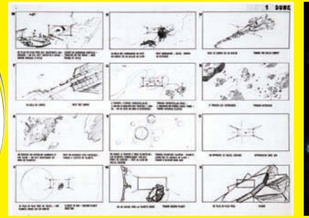
▲H・R・ギーガーによる悪役・ハルコンネン男爵の城デザイン画



メビウスによるコスチューム・デザイン▲

▲DUNEストーリーボードより

▼DUNEストーリーボードより



▼クリス・フォスによる宇宙海賊船デザイン

意識拡張作用をもつ香料(スパイス)が世界を変える――ヒッピーが支持した"環境SF"『デューン』

TEXT:柳下毅一郎

60年代の聖典と呼ばれるようになったSF小説はいくつかある。もっとも有名なのはロバート・A・ハインラインの「異星の客」だろうが、フランク・ハーバートの「デューン/砂の惑星」もそのひとつとして名高い。「デューン」が発表されたのは1965年、フラワー・ムーブメントまっさかりのころだった。意識拡張作用をもつ香料(スパイス)メランジが世界を変えるという物語は、LSDによる冒険に乗り出していたヒッピーの若者たちの心に直接訴えかけたのだ。「デューン」の衒学的内容(ハーバートはユング心理学を通じて禅を学んでいた)や、環境テーマも同様である。「デューン」は世界最初の環境SFとも言われる。それまで、SFにおける異世界とはせいぜいが怪物が出てくるかこないかの程度のものでしかなかった。ハーバートは「デューン」の舞台である砂の惑星アラキスと怪物サンドワームを説得力のあるかたちで構築してみせたのだ。アラキスにおいては水の不在とサンドワーム、メランジの存在とが複雑に絡みあっている。ハーバートは相互に影響を与えあう惑星の生態系を考案してみせたのである。怪物サンドワームとアラキスの生態系には不可欠な存在なのである。惑星とその環境を結みあったひとつのものとしてとらえるアイデアは、ラブロックのガイア理論が唱えられ、地球環境に目が向けられた時代風潮にも合致するものだったのだ。

ホドロフスキーのDUNE

ホドロフスキーのもとに集まった“ウォーリアー”たち

フランク・ハーバートによるSF小説『デューン』を映画化するにあたり、ホドロフスキーは「ウォーリアー(戦士)」として様々なジャンルから非凡な才能を持つアーティストを集結させようとした。未来の世界に君臨する狂気的な銀河帝国の皇帝・シャッダム四世にはシュルレアリスムの代表的作家、**サルバドール・ダリ**。『市民ケーン』など映画監督としてのみならず俳優としても知られる**オーソン・ウェルズ**は、砂の惑星アラキスで莫大な富を築いた大公家ハルコンネンの当主で、重すぎる体をいつも宙に浮かせているバロン・ハルコンネン男爵を演じる予定だった。ハルコンネン男爵の甥フェイド・ラウサには**ミック・ジャガー**。知性的なラウサと強烈なカリスマ性を持つミックのイメージが重なったのだろう。ハルコンネン男爵に仕えるメンタート(人間コンピューター)のピーターには、アンディ・ウォーホルの『悪魔のはらわた』をはじめ性格俳優として知られる**ウド・キア**が選ばれた。ハルコンネン家と対立するアトレイデ家の当主で、指揮官として高いリーダーシップを持つレト公爵には、クエンティン・タランティーノ監督の『キル・ビル』シリーズなどアクション俳優として存在感を放つ**デヴィッド・キャラダイン**が抜擢。さらに、73年の『狂気』をはじめ現在まで絶大な人気を誇るサイケ/プログレの代表的バンド、**ピンク・フロイド**がアトレイデ公爵の音楽を担当するはずだった。

ILLUST:五味岳久

6.14(土)より 新宿シネマカリテ、ヒューマントラストシネマ有楽町、渋谷アップリンク、立川シネマシティ、シネマ・ジャック&ベティ、シネ・リーブル梅田 ほか 全国順次公開

監督:フランク・パヴィッチ　出演:アレハンドロ・ホドロフスキー、ミシェル・セドゥー、H・R・ギーガー、クリス・フォス、ニコラス・ウィンディング・レフン
2013年/アメリカ/90分/英語・フランス語・ドイツ語・スペイン語/カラー/16:9/DCP　配給:アップリンク/パルコ　http://www.uplink.co.jp/dune/

リアリティのダンス

第66回カンヌ国際映画祭でプレミア上映された23年ぶりの新作!残酷で美しい人間賛歌。

私にとってはアートはアート以上のもの、
感動を与えたり賞賛を得る以上の
何かでなければいけない。
——アレハンドロ・ホドロフスキー

『ホドロフスキーのDUNE』撮影時に再会したミシェル・セドゥーをプロデューサーに、そして息子たちと妻をキャストとスタッフに起用し、生まれ故郷チリの田舎町を舞台に描く、自伝的作品。映画の中で家族を再生させ、自身の少年時代と家族への思いを、現実と空想を瑞々しく交差させファンタスティックに描く。

7.12(土)より新宿シネマカリテ、ヒューマントラストシネマ有楽町、渋谷アップリンク、シネマ・ジャック&ベティほか、全国順次公開

監督・脚本:アレハンドロ・ホドロフスキー　出演:ブロンティス・ホドロフスキー(『エル・トポ』)、パメラ・フローレス、クリストバル・ホドロフスキー、アダン・ホドロフスキー
音楽:アダン・ホドロフスキー　原作:アレハンドロ・ホドロフスキー『リアリティのダンス』(文遊社)　2013年/チリ・フランス/130分/スペイン語/カラー/1:1.85/DCP
配給:アップリンク/パルコ　http://www.uplink.co.jp/dance/

NEWS 2014年4月、ホドロフスキー監督来日決定!!

ホドロフスキー監督講演&『リアリティのダンス』プレミア上映会開催!

当日会場の皆様の中でご希望の方に公開タロット・リーディングを行います

2014年4月22日(火)18:00開場/18:30開演
会場:新橋・ヤクルトホール
前売料金:2,500円/当日料金:2,800円

前売券はe+で発売中。
詳細は公式HPをご覧ください。

ホドロフスキーと100人座禅大会

メキシコで日本の禅僧の弟子となったホドロフスキーと一緒にお寺で座禅を組もう!
当日はホドロフスキー監督による『金と欲望』というテーマでの説法を予定しています。

詳細は4月3日(木)に公式ホームページで発表いたします。

THIS IS ALEJANDRO JODOROWSKY VOL.2
『ホドロフスキーのDUNE』の世界

発行日: 2014年4月1日
発行人: 浅井隆(アップリンク)
編集人: 露無栄(アップリンク)、駒井憲嗣(アップリンク)
表紙デザイン: 河村康輔
本文デザイン: 大場小麦(アップリンク)

お問合せ:アップリンク
〒150-0042 東京都渋谷区宇田川町37-18　トツネビル4F
TEL:03-6821-6821
FAX:03-3485-8785
film@uplink.co.jp
http://www.uplink.co.jp

© 2013 CITY FILM LLC. ALL RIGHTS RESERVED

UPLINK　PARCO